

教育改善のためのIR入門 ワークショップ

2013年8月21日
中井俊樹(名古屋大学)
山田剛史(愛媛大学)



本ワークショップの到達目標

- どのような指針にそってIRの実践を進めたらよいかを自分の言葉で説明できる。
- IRの実践の標準的なプロセスと課題を自分の言葉で説明できる。
- IRの知識と技能を教育改善の具体的事例に応用することができる。
- IRに関する多様な考え方や経験を尊重し、参加者間で共に学びあう雰囲気貢献することができる。
- ワークショップ終了後も自ら学べるように、自身の課題と学習の情報源を把握する。

課題2 中途退学への対策1

- あなたの大学で中途退学者が増加しています。学長から中途退学者を減らす方策を考えるように指示が与えられました。グループで方策を考えてください。

課題3 中途退学への対策2

- 中途退学者に関する情報を紹介したところ、大学のIR部門から図1のグラフが提供されました。それを参考に方策を再度検討してください。
- 方策を考える上で前回の議論と内容は異なりましたか。
- 適切な方策を考える上で、図1以外にどのような情報をIR部門に提供を依頼しますか。

データ活用の有効性

昨今の経済状況を見る限り、経済的理由で中途退学していると思う。経済的支援を検討すべきではないか

調査によると、本学では経済的理由で中途退学する割合は5%程度です。学習意欲の低下と人間関係の悩みだけで原因の8割を占めるので、まずはその対策から始めませんか

- 現状を正しく把握し、適切な意思決定を行うことができる
- 周囲に対して説得力を増し、組織での合意を得やすくなる

IRの定義

- 「機関の計画立案、政策形成、意思決定を支援するための情報を提供する目的で、高等教育機関の内部で行われる調査研究」(Saupe、1990)
 - データ提供ではなく情報提供
 - 学問志向の研究というよりも実践志向の強い調査研究

IRの機能と領域(Thorpe 1999)

- 計画策定支援(planning support)
- 意思決定支援(decision making support)
- 政策形成支援(policy formation support)
- 評価活動支援(assessment support)
- 個別テーマの調査研究(conducting research studies)
- データ管理(data management)
- データ分析(data analysis)
- 外部レポート(external reporting)
- 内部レポート(internal reporting)

IRの実践の多様性

- 期待される役割による3つの形態
 - 外部評価への対応業務を重視したIR
 - 経営活動の改善を重視したIR
 - 教育活動の改善を重視したIR
- 多様化している他の要因
 - 全学的なIR部門か各部局で分散するか
 - 官僚的な組織か同僚的な組織か
 - 教員が担当するか、職員が担当するか
 - その時々 of 執行部の特徴やニーズ

IRの多様性に対する2つの立場

- 差異を強調する立場
 - IRの目的や置かれた環境によって異なる。優れたIRの実践はその状況に依存すると言えない。
- 共通部分を強調する立場
 - 大学間のIRの差異を認識しつつも、優れたIRの実践には共通する内容が存在する。

IR実践のための7つの指針

- 大学の目標達成に資する活動を進める
- データを意味のある情報に変換する
- データに基づく判断の有効性と限界を理解する
- 客観性と中立性を重視する
- 調査と公表においては倫理面に配慮する
- 学内外の多様な関係者と連携を進める
- 専門性を高める機会をつくる

1. 大学の目標達成に資する活動

- IRのIは、機関(Institutional)
- ミッションに基づく調査研究
- 大学の現状と課題についての理解
- とりうる意思決定や組織の論理の理解
- ただし、受動的な業務という意味ではなく、自らが課題を発見していく積極的な姿勢が重要

2. データから情報への変換

- データはある事実を表した無機質なもの
- データを意味ある情報に変換するのが、IRの本質であり醍醐味
- その変換に求められるもの
 - 問題意識
 - 仮説
 - 基準
 - 分析手法

3. データに基づく判断の有効性と限界

- 有効性
 - 現状を正しく把握し、適切な意思決定を行うことができる
 - 周囲に対して説得力を増し、組織での合意を得やすくなる
- 限界
 - 大学は成果を測定しにくい、数字がすべてを表さない
 - 「…である」から「…すべき」へは論理的飛躍（ヒュームの法則）
 - 伝統的価値観との葛藤が生じる

4. 客観性と中立性の重視

- 意思決定は個々の構成員の利害に影響を与える
- 求められるのは、客観性と中立性
- 一部の構成員にとって都合がよくなるようにデータを解釈したり、不都合な情報を隠したりしない
- そのような行為は、大学のためにならないだけでなく、IRに対する信頼をも低下

5. 調査における倫理面の配慮

- IRに携わる者としての責任と自覚
- 調査の対象者、協力者、大学組織などに対して倫理的に適切な行動
 - 法令や規則の順守
 - 調査対象者などの安全や人権の尊重
 - 調査の過程や成果の公表方法などの事前の説明と同意
 - 個人情報の収集と保護
 - 調査データの管理の徹底
 - 対象者や協力者の負担を極力減少する努力

6. 学内外の多様な関係者の連携

- 学内のどこにどのようなデータがあるのかを把握
- 調査には多くの関係者の協力が必要
 - 調査の回答者として学生や教職員
 - 特殊な分析に関しては学内の研究者に協力
 - 卒業生、高等学校、企業
- IRの活動の意義を広く伝える必要
- IRの業務で協力を得た関係者には、可能な範囲で調査結果を知らせる

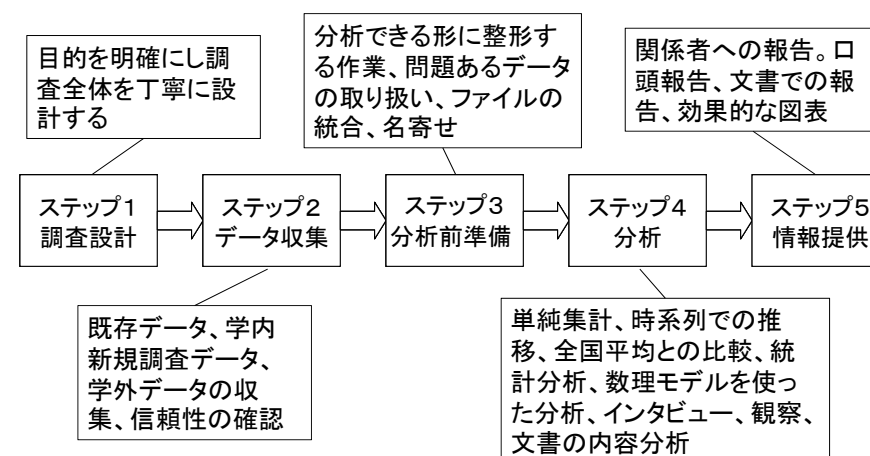
7. 専門性を高める機会

- IRは学際的な分野
 - 教育学、心理学、統計学、情報学、経営学など
- 専門性を高める二つの視点
 - 自分自身の職能開発。近年では職能開発の機会は増加。調査方法については多くの既存書籍あり。
 - IR担当者全体の職能開発。アメリカでは1965年にIRに関する専門職団体が設立され、IRに関わる知識や技能を開発・蓄積・共有。
- 大学によってはデータや分析方法、分析結果を外部に公開できない場合もあるという課題

課題4:IR実践のための指針

- 提示した7つの指針に対して以下の作業をグループで行ってください。
- それぞれの指針を重要度に合わせて○、△、×をつける
- 7つ以外で追加すべき指針があれば追加する

IR実践の5つのステップ



分析の基本

- 学生の一日の授業時間外の学習が平均2時間だった場合、その数値が適切な範囲内にあると言えるか？
- データを意味ある情報に転換する基本的な方法の一つは、基準を探すという作業
- 基準の探し方
 - ・ 過去との比較
 - ・ 集団間のデータの比較（男女別、学部別、学年別、入試形態別などの大学内の比較、他大学や全国平均との比較）
 - ・ 法規や外部機関が定めている基準との比較
 - ・ 大学自身が設定する内的基準との比較

課題5: クラス規模の事例

- 所属する大学の教養教育の課題の一つは、必修科目である初年次学生向けのセミナーの少人数化です。30名を受講者数の基準とし、それを前提に教員の授業担当コマ数のルールが定められています。苦勞して全学で合意した授業担当コマ数のルールを変更することは容易ではありません。
- 少人数化に向けた改革を進めるために、どのような主張と根拠を使用しますか。